

芸術支援のカタチを探る

Writer

高木 諒一 TAKAGI Ryoichi

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース3年

私は今、筑波大学芸術専門学群芸術学専攻芸術支援コースというところに所属し、芸術の力を支えるための環境形成、支援・応用にとりくむための勉強をしている。しかし、芸術支援という言葉が示す範囲は広く、また曖昧であり、そのイメージを捉えにくいものであると思う。「誰を、どこで、どうやって、そして、何のために」という可能性が非常に多様であるからである。この芸術支援というコースは2003年(平成15年)に開設され、まだ出来たばかりで歴史が浅いではあるが、卒業して芸術支援活動を行っている先輩方に一度お話を伺うことで、芸術支援というカタチを探り、見解を深めていきたいと考えた。

お話を伺うことができたのは、芸術支援の卒業生、石田佑佳さん、善名朝子さん、志村春海さんである。石田さんは現在、システムエンジニアとして働きながら、あをば荘(*1)というスペースの運営メンバーとして活動している。善名さんはHAREKASA PROJECTの代表を務めながら、アートビジネスを学ぶ準備をしている。志村さんは、筑波大学のアート・デザイン・プロデュース(*2)という授業に関わり大子町でコーディネーターとして活動している。3人の在学中のことから卒業後のこと、そして、これからの展望についてお話を伺うことにした。なお、志村さんには、当日スカイプで参加していただいた。

石田さん

私がいわゆるアート業界につながりを持ったのは、東京で行われたレクチャーシリーズに参加したことがきっかけでした。そこで、大学一年生で分からないことだらけだったので、ボランティアでも何でもします、というスタンスで動いていました。そのことで東京であるコンペティションのお手伝いをする機会があり、そこで知り合った作家さんの展覧会の設営の手伝いをする経験も出来ました。

3年生の頃に行ったアークス・プロジェクト(*3)でのインターンも非常に良い経験でした。アークスはアーティスト・イン・レジデンス(*4)事業を主な活動として行っており、日本の現代美術を扱うレジデンスとして老舗です。海外のレジデンスに参加して作家としてやっていこうと覚悟をしてやっている海外のアーティストの覚悟を見ることや、国によるアートに対する考え方に触れることができました。

大学卒業後、私は企業に就職しました。就職を選択した理由は二つほどあって、一つは同世代の人たちを支援したいという気持ちがあったことです。同学年の制作する人たちの将来について話を聞いていると、やはり経済的な問題がまずあると感じました。自分の生活も安定するし、応援したい作家さんに二次的な経済的援助も可能なのではないかと考えました。もう一つはメセナ協議会の人たちに「一度企業のやり方を見てみてもいいのではないか」と言われたことの後押しがあったことです。

社会人として働きながら休みのある土日などに東京アトリサーチラボ(TARL)というアートプロジェクトの批評・評価を試みる講義などに参加し、そこで美術に関する講義も受講し、アートとの関わりを続けていました。現在、関わっているのは、あをば荘という企画スペースではなく、いろんな人が出入りできる空間になればと考えています。例えばですが、このスペースが運営する人や作家の人たちが入れ替わりながらも、あをば荘という場所が運営されていけるようになればと思っています。

善名さん

私が一年生の頃、同期の志村さんに紹介して頂き、スズキアキオさんが率いる展示設営チーム「bibariki(ビバリキ)(*5)」に参加していました。様々なギャラリーの展示設営や作品設置、レセプションパーティの準備などのアシスタントをしていました。美大や一般大学の学生を中心に20代の若者が集まり、協力して鈴木さんのサポートをしていました。表参道ヒルズで篠山紀信展の設営準備を手伝っていて、その打ち上げで何気なく「大学の外に出ている活動していきたいって思っているんですけど、どうしたらいいですかね」と話したら、そこで他のプロジェクトでのイベントの手伝いを紹介してもらうことができ、人脈はこうやって繋がって行くんだと感じました。

私が在学中から続けているアートプロ

ジェクトが「HAREKASA PROJECT(*6)」です。「ハレカサ」というのは「広げた人の心をハレにする傘」という意味を込めていて、ビニール傘の内側にマジックや筆で絵を描いたアート傘です。ビニール傘は無個性で誰でも使い易いという利点がありますが、一つ一つ区別することが出来ないで非常に盗まれやすく、無くしやすいものです。そこで作家さんに傘を素材に絵を描いてもらい、世界で一本だけの傘を作ってもらうことにしました。ハレカサはファッション性も高く、利用者には雨の日にその傘を差して歩いてもらうだけで、その作家の広告として機能するメディアとなります。しかし、このアイデアをプロジェクトとして形にするまで時間がかかりました。どうやって具体的に実行するか、誰とやるか、どのように運営するかなどを考えなければいけなかったからです。あるイベントを手伝っていた時、たまたま私が担当したブースの方と仲良くなり、アートやデザインのパラットフォームを作る活動をされている方を紹介してもらいました。後日、私、ブースの方、ご紹介頂いた方の3人でお会いする機会を設けてもらいました。その時に意気投合し、今一番実現させたいことを聞かれ、そこで傘のプロジェクトをやってみようと言った所、3人でプロジェクトをスタートさせることが決まりました。

その後、初めてハレカサを一般の方の前で展示販売したとき、買ってくださる方が5人いました。ハレカサは価値を認められるプロジェクトであるという確信を得て、今に至っています。私の芸術支援活動の根幹にあるのは、才能のあるアーティストを支援する場所を作りたいということです。そのために金銭的にも作家に還元できるアートプロジェクトを行っていきたくて考えています。

志村さん

私は現在、茨城県大子町で大子町と筑波大学の連携事業「まいん」イロドリ計画のコーディネーターとして、今年度から企画観光課で働いています。

また、イロドリ計画とは別の事業ですが、大子町で8ミリフィルムを探すプロジェクトにも関わっています(*7)。これはもともと大阪のremoというNPO(*8)が各地で継続している活動で、家などに眠っている8ミリフィルムを文化資源として発掘し、地域映像アーカイブを作るという試みです。

今回、卒業生の3人のお話の中には多くのアートに関わる活動の名前が出ており、それぞれの立ち位置や芸術の現場と関わることへの具体的なアプローチが示され、社会の中での芸術支援のカタチが少しずつ見えやすいものとなったのではないかと思います。そして、一度現場に関わってみることで急に世界が広がり、狭いアート業界が見えてくる、というお話が印象に残った。

石田さんは地域と芸術の間を社会人という立場からも探り続けている。善名さんは自身のプロジェクトから自分の信じたアーティストの居場所を作っていこうとしている。志村さんのお話からは、芸術より広い文化支援というカタチを感じることができた。資源によるコミュニティの形成、記録における地域の記憶。それは世代という時間的なものを越え、関係を結ぶことができる。アートプロジェクトの持つ可能性として、コミュニティの新しい回路、プラットホームとしての機能があり、新しい芸術の居場所として存在しうるのではないかと、ということも浮かび上がってきた。

芸術支援は社会の中で何を要求されているのか。作家と自分の立場というものを考え、自分が何をすべきなのか、何をしたいのかを考えていくことが必要なのだと感じた。



講演会の様子

*1
あをば荘
東京都墨田区にあるスペース。
<http://awobasoh.com/>

*2
アート・デザイン・プロデュース(ADP)
「アート・デザイン」を通して、物事やそれに関わる人をプロデュースしていくプログラム。毎年、様々な活動が行われる。

*3
アークス・プロジェクト(ARCUS PROJECT)
<http://www.arcus-project.com/jp/>

*4
アーティスト・イン・レジデンス
アーティストを招聘して、そのスタジオで滞在制作を行ってもらうこと。

*5
インストールチーム「bibariki(ビバリキ)」
公式ブログ <http://bibariki.blogspot.jp/>

*6
ハレカサプロジェクト(HAREKASA PROJECT)
<http://harekasa.com/>

*7
「大子町・8ミリフィルムを探しています!」
<http://blog.livedoor.jp/daigo8miri/>

*8
remo[NPO 法人 記録と表現とメディアのための組織]
<http://www.remo.or.jp/ja/>



ハレカサプロジェクトより
NOZA《雨園》,2010(c)HAREKASA PROJECT



(左)善名朝子さん、(右)石田佑佳さん